

他に倫理の歌として「うつくしき」や「螢（の光）」「君が代」そして「思ひいづれば」がある。その中の「螢」は、外国のメロディーを用いたにもかかわらず、その原曲が意味することとは無関係に、

ほたるのひかり まどのゆき

書よむつき日かさねつゝ

いつしか年もすぎのとを

あけてぞけさは わかれゆく

と付けている。これは、古人が螢の光や窓の雪あかりで勉強した事から、努力して学問をしなさいという倫理をあてはめたのである。

そして、「五常の歌」にしろ「五倫の歌」にしろ幼い者にとっては、意味を理解することは容易なことではない。しかし、修身教科書の序文にもあるように、幼いころには意味が理解できなくても、よく記憶しておれば次第に意味がわかるようになり、一生涯役だつものであると説いている。

このように、この唱歌集は、西洋音楽を取りいれながらも、儒教主義の仁義忠孝観に基づき、歌詞に於いて、国家道徳や人間倫理を歌い表しているのである。

以上、初期の音楽教育と唱歌集の大略を眺めてきたのであるが、ここでいえることは、日本的な基盤にどのような西洋を取り入れてゆくかという、当時の一般的な課題の中に、音楽教育が置かれていたということである。

そして西洋摂取の際に、和魂洋才といわれているように、日本的な倫理を尊重してゆくことを、教育当事者たちが強く意識しており、それが、歌詞に見られる倫理性となっている。当時の倫理はいうまでもなく、江戸期の延長で、儒教的道徳観に立つものであるが、それを踏

まえて、しかも、天皇制国家としての新しい、方向を打ち出しているところに、明治的な、そして日本の近代を性格づけた政治性を見出すことが出来るのである。

その後の音楽教育は、次第に整備され、西欧的な音楽が次第に一般に滲透してゆく。

そして、歌詞に見られた倫理性への反駁、或いは難解さが反省をもたれるようになるのは大正に入ってからで、赤い鳥を舞台とした新童謡運動が、在野の詩人、作曲家によって進められ、童心主義による、明るいメロディーを付された唱歌が、児童の日常生活の中にとけこみ、小学生の歌を変え、音楽教育を変えてゆくのであるが、その辺については他日を期したい。

注1、図表一参照。

注2、図表二参照。

注3、図表三参照。

注4、図表五参照。

注5、図表六参照。

注6、図表七参照。

注7、図表八参照。

注8、図表九参照。

注9、図表十参照。

注10、図表十一参照。

注11、図表十二参照。

の「ねむれよ子」は、父母の愛にはぐくまれ、やがては父の教えを守り、母の情を慕い、両親の愛が理解できるような心豊かな人に育ってほしいという父母の願いを子に教えた歌である。

次に「大和なでしこ」の歌詞を示すと、

一、やまとなでしこさま／＼に

おのがむき／＼さきぬとも

おほしたててしち／＼は／＼の

庭のをしへにたがふなよ

二、野辺の千草のいろ／＼に

おのがさま／＼さきぬとも

生したて／＼しあめつちの

つゆのめぐみをわするなよ

子 美 貝 深

これは、人の生き方を教えたもので、生み育ててくれた父母の教え、家庭の教えにはそむいてはいけない。また、人を育てた自然、天地の尊さを忘れてはいけない。人はまっとうに生きなさいと教訓している。

また次の「五常の歌」は、

一、野辺のくさ木も雨露の

めぐみにそだつさまみれば

仁てふものはよのなかの

ひとのこゝろの命なり

二、飛驒の工のうつ墨に

曲もなほるさまみれば

義といふものは世の中の

人のこゝろの條理なり

三、威儀ほかにあらわれて

謹慎みてるさまみれば

礼てふものは世の中の

ひとのこゝろの掟なり

四、神の隠せる秘事も

さとり得らるゝさまみれば

智といふものは世の中の

人のこゝろの宝なり

五、月日と共にあめつちの

循環たがはぬさまみれば

信てふものは世の中の

人のこゝろの守りなり

これにも儒教の教えが流れこんできており、仁、すなわち美德は人の心の命であり、義は人の心の条理であり、礼儀正しいけんその態度こそ人の心の掟であり、智は人の心の宝であり、信は人の心の守りであるという道徳を教えている。そして、この「仁義礼智信」こそ人間の生き方であり、理想的な生き方ではあるが、これに劣らぬ生き方をしなさいと教えている。

次に「五倫の歌」を示すと、

父子親あり 君臣義あり

夫婦別あり 長幼席あり

朋友信あり

これは、子が親の教えを守り、君主と臣下の間におのずから倫理を守る。また、夫婦は一体ではなく家族の中心たる者は、夫であり、婦は夫に従うことを教え、年上の者を敬えと、年上・年下の順序や規律を教え、友の間には信頼を持って教えている。

二、ねむれよこ  
 ははそはの母のなさけや志たふらん

ねむれよこ  
 ちちのみの父のおほせやまもるらん

牛 若 丸

♩=92

キ ヤ ウ ノ ゴ デ フ ノ ハ シ ノ ウ エ  
 ダ イ ノ ヲ ト コ ノ ベ ン ケ イ ガ  
 ナ ー ガ イ ナ ギ ナ タ フ リ ア ゲ テ  
 ウ シ ワ カ メ ガ ケ テ キ リ カ カ ル

図表12

三、ねむれよこ  
 かはらぬ顔<sup>かほ</sup>をがみませ  
 ねむれよこ

ねむれよこ  
 よくねておきてちよはよの

月

♩=88

デ タ デ タ ツ キ ガ  
 マ ー ル イ マ ー ル イ マ ン マ ル イ  
 ボ ー ン ノ ヤウ ナ ツ キ ガ

図表13

紙 鳶 の 歌

♩=112

一 タ コ 一 タ コ 一 ア ガ レ  
 二 糸 コ 二 糸 コ 二 じ だ 二  
 三 ア レ 三 ア レ 三 サ ガ ル  
 カ ど ヒ ゼ ち ケ ヨ ら ヒ ク も ケ ウ ま イ ケ け ト テ ず ヲ  
 ク く ア モ も 一 一 マ マ ア デ 一 一 ア あ ガ レ  
 テ て ハ ン ナ マ マ ス デ ナ ア あ ガ レ  
 れ れ ヲ

図表14

わが日の本

の「春のやよひ」や  
 一、松のこかげに立ちよれば  
 ちとせのみどりぞ身にはしむ  
 梅がえかざしにさしつれば  
 かしらに春のゆきつもり  
 鶴のけごろもかさぬれば

ケすテも  
 ラきミシ  
 ボとシの  
 サとニは  
 アほミに  
 ノぶキレ  
 トけピラ  
 ー  
 モさヒあ  
 ノにノつ  
 ヒまタう  
 かもヌど  
 ワくキま  
 1  
2  
3  
4

テなりき  
 ミばナゆ  
 ギぎルの  
 フつタね  
 アうワみ  
 ゲふモば  
 カほりち  
 ー  
 ヒにカお  
 ルにノの  
 メねヨと  
 スきコモ  
 カカトふ

モにテも  
 トちべと  
 ビつナざ  
 ー  
 マめシま  
 ー  
 コあオヤ  
 トりコち  
 ー  
 ビけモう  
 シにトの  
 コきマこ  
 ロつーや  
 モなヤみ

ンリせら  
 べとカそ  
 ヌとノの  
 リなきゆ  
 シはアふ  
 べるノる  
 ヲぐレゆ  
 フーハー  
 ケつアさ  
 ツひジに  
 タそナつ  
 ルら一と  
 ハあオひ

図表10

桃 太 郎

あるかといふことを教え、国を愛することを教えることである。次に歌詞を示す、

一、ねむれよ子 よくねるちは

モ モ タ ラウ サン モ モ タ ラウ サン  
 オ コ シ ニ ツ ケ タ キ ビ ダ ン ゴ  
 ヒ ト ツ ワ タ シ ニ ク ダ サ イ ナ

図表11

あきの霜こそ身にはおけ  
の「松の木蔭」。そして

一、春見にゆきませ芳野の  
桜

あきみてつげませ立田  
のもみち

二、よし野はさくらの花さ  
くみやま

たつたは紅葉のちりし  
くながれ

の「桜紅葉」があり、他に  
「かをれ」「春山」「あがれ」

「いわへ」「千代に」「和歌の  
浦」「春は花見」「鶯」「野辺に」

「春風」「花さく春」「見渡せ  
ば」「わが日の本」「蝶々」「閨

の板戸」「若紫」「薫りに志ら  
る」「隅田川」「富士山」「松ぼ

ろ」「雨露」「玉の宮居」がある。  
これらは、日本の四季・自

然を歌うことによって、日本  
がいに美しい素晴らしい国で

あるかといふことを教え、国を愛することを教えることである。次に歌詞を示す、

松の木蔭

図表 8

二、はなたちばなにもほふなり  
 軒のきのあやめもかをるなり  
 ゆふぐれさまのさみだれに  
 やまほととぎすなのるなり  
 三、秋のはじめになりぬれば  
 ことしもなかはすぎにけり

春のやよひ

図表 9

四、冬の夜さむのあさぼらけ  
 わがよふけゆく月かげの  
 かたぶく見るこそあはれなれ  
 ちぎりて山路はゆきふかし  
 こころのあととはつきねども  
 おもひやるこそあはれなれ

閨の板戸

子 ヤ ノー イ ター ド ノ ア ケ ユ ク ソ ラー ニ  
子 グ ラ ヲ イ ズー ルー モ モ ヤ ソ ト リー ハ

ア サ ヒ ノ カ ゲー ノー サ シー ソー メー ヌ レ バ  
カ ス ミ ノ ウ チー ニー ト モー ヨー ビー カ ハ シ

ユ メ ミ ル テー モー ト ク オ キ イ デー テ  
ア サ イ 子 ス ルー ミ ノ ソ ノ オ コ タ リー ラ

ム レ ツ ツ ハ ナー ニー マ ヒー アー ソー ブ ナ リ  
イ サ ム ル サ マー ナ ル ハ ルー ノー アー ケ ボ ノ

図表 5

か を れ

1 カ ラ レ ニ ホ ヘ ソ ノ フ ノ サ ク ラ  
2 と ま れ や ど れ ち ぐ さ の ほ た る

3 マ 子 ケ ナ ビ ケ ノ ハ ラ ノ ス ス キ  
4 な け よ た て よ か は せ の ち ど り

図表 6

春 山

ハ ル ヤ マ ニ タ ツ カ ス ミ  
ア キ ヤ マ ニ ワ タ ル キ リ

サ ク ラ ニ モ ル セ ミ ズ ニ モ  
キ ヌ キ ス ル コ チ シ テ

図表 7

を明らかにするのが本旨であるとし、その後には、はじめて知識や技術を学ぶべきであると述べられている。その儒教主義的復古思想にもとづく教育政策は、明治十三年ごろからの教科書に対する施策にもあらわれた。その傾向が明治十四年十一月に出版された「小学唱歌集初編」の歌詞にも見られる。

この曲集には、三十三曲が納められており、自然すなわち日本の四

季を歌ったものと、日本の倫理を歌ったものがある。半数以上が日本の美しさを歌ったもので、例えば、

一、春のやまへのあけぼのに

四方のやまべを見わたせば

はなざかりかもしらくもの

かゝらぬみ子こそなかりけれ

や「わたしの人形は よい人形——」の「人形」そして「でんく虫々  
かたつむり——」の「かたつむり」、「出て来い出て来い池の鯉——」  
の「池の鯉」等である。  
この言文一致の唱歌は、最初かなり反対されたようだが、対象とな  
る児童が喜び、次第に世間の支持を得るようになった。

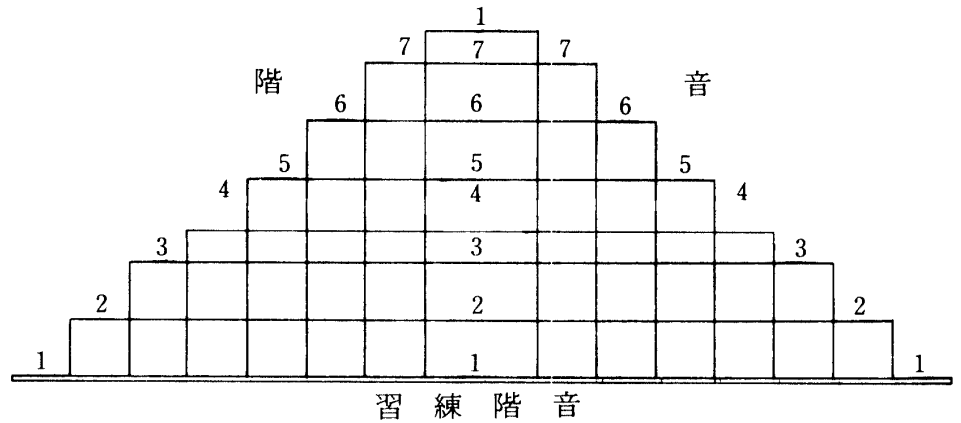
図表 3

六、唱歌集の歌詞に見られる倫理性

明治二十年代になり、明治維新頃の洋風尊重や文明開花の思想から再  
び伝統的な国風が尊重され、儒教主義を基本とする皇国思想への転換  
がはかれるようになった。その方向を指示したものに「教学聖旨」  
がある。それによるとわが国の教育の根本精神は仁義忠孝の道德観

うつくしき

図表 4



- [一] 1,2.. 2,1\_      [二] 1,2,3\_ 3,2,1\_      [三] 1,2,3,4 4,3,2,1.  
 [四] 1,2,3,4,5\_ 5,4,3,2,1\_      [五] 1,2,3,4,5,6\_ 6,5,4,3,2,1\_  
 [六] 1,2,3,4,5,6,7,1\_ 1,7,6,5,4,3,2,1\_

図表1

一般に理解される地盤となつてゆくことは容易に理解できるのである。

この唱歌集には、三十三曲の唱歌があり、そのうち半数くらいは外国の唱歌で、あとの半数は、伊沢修二とメーソン等の新曲らしい。

外国曲としては、「見渡せば」、この曲は後世歌詞を変えて「むすんでひらいて」の歌で愛唱されている。他には、スペイン民謡の「蝶々」スコットランド民謡の「蛍（の光）」や次頁の楽譜にある「うつくしき」

[師]	[生]	[師]	[生]
1、2、3 -	1、2、3 -	3、2、1 -	3、2、1 -
1、3、2 -	1、3、2 -	2、3、1 -	2、3、1 -
1、3、5 -	1、3、5 -	5、3、1 -	5、3、1 -
1、4、6 -	1、4、6 -	6、4、1 -	6、4、1 -
[師]	[生]	[師]	[生]
1、3、5、5	1、3、5 -	1、3、5、5	1、3、5 -
5、3、1、3	5、3、1 -	5、3、1、3	5、3、1 -

図表2

いたメロディー、しかもほとんどが四拍子で、児童用としては不向きであった。

そして曲には、速さの表示も息つきも示されず、ただ歌詞の方に息つき場所として「○」印が示してあるだけである。その点、明治四十四年に文部省が出版した「尋常小学唱歌」は、日常生活で使うことばを用い、曲も明快なリズムを使用し、音域や音程も児童の発達段階に適応するよう作曲されている。そして楽譜に息つきが示され、速さの表示も数字による表示法を用いて示されている。

図表十三、十四の楽譜でもわかるように、この「尋常小学唱歌」は、ほとんどが二拍子で、児童向きの親しみ易い曲集である。

「桃太郎」や「牛若丸」<sup>⑩</sup>は、日本の昔話の内容を歌った曲である。他には、今も愛唱されている「ぼつぼつば 鳩ぼつば——」の「鳩」

④「閨の板戸」等である。

次に新曲の楽譜を示し分析してみると、「かをれ」<sup>⑤</sup>「春山」<sup>⑥</sup>等は歌曲というより、音程の練習曲にすぎない。

次の「松の木蔭」<sup>⑦</sup>も順次進行で、リズムの変化もなくおもしろ味がない。

そして次の楽譜でわかるように「春のやよひ」<sup>⑧</sup>と「わが日の本」<sup>⑨</sup>が、同じメロディーであるのは何故だろう。

これらの唱歌でわかるように、和洋折衷の方針にそつて新曲を作りだしたが、質的にはすぐれておらずたいへんなじみにくい。また古語や雅語の歌詞に落ち着



三、紙刺し 十四、縫取り 十五、書き方 十六、数え方 十七、読み方 十八、唱歌 十九、遊嬉 がある。

このように唱歌が教科として取り上げられるようになったが、実際には、教授法が整ってからと実施されなかった。しかし政府が唱歌を学校の教科目に入れたということが、洋楽を全国に普及する動機となったのであり、これを成し遂げる力となったのが、伊沢修二である。

伊沢修二は、明治八年八月米国留学し、明治十年ブリッジウォーター師範学校在学中に初めて音楽を学んだ。その時の教師は、米ボストン府学校音楽監督兼教師をして名声のあったメーソンであった。伊沢は、日本人で始めて音楽を学び、明治十一年五月に帰国した。彼は、日本において音楽教育が実施されていないことを痛感し、文部省上局に対し「見込書」を提出した。この内容は、次の通りである。

音楽に対して世間には三通りの説がある。甲説は「東洋音楽はやめて、西洋の音楽を移植する」乙説は「我が国固有の音楽を作り出し育成する」丙説は、「東洋と西洋の音楽を折衷して我が国に適するものを制定する」そのうち、丙説が最も妥当であるが、それを実行するのは、至難のわざである。しかし、丙説が妥当ならばやり遂げる方法をみつけないといけない。その方針を実際に行うべき事として、第一に「東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること」第二に「将来国楽を興すべき人を養成すること」第三に「諸学校に音楽を実施すること」(要約)と三つの事を述べている。この彼の案を遂行するため、文部省は音楽取調掛を用いて音楽伝習を行わせ、彼の教師であったメーソンをアメリカから招き、明治十三年三月音楽取調掛の教授にあてた。

音楽取調掛は、音楽教育の研究機関として設置されただけでなく、邦楽経験者を集めての洋楽習得、唱歌教材の創作等を行った。また

その新曲は東京師範学校附属小学校児童、東京女子師範学校附属幼稚園々児に試みられ、その佳なるものを楽譜にし、掛図も用いて全国の学校に普及させた。

音楽取調掛は明治十四年「小学唱歌集初編」また教授用として「唱歌掛図初編」を出版した。この唱歌集は一年足らずで八千部を刷ったという。

このことからこの出版がいかに待望せられたかがわかる。

##### 五、小学校に於ける音楽教科書

明治十四年十一月出版の「小学唱歌集初編」の冒頭には、音階が表<sup>①</sup>示され、次頁には、教師と生徒との関係を示した表<sup>②</sup>、その次の頁には、五線と音符についての表<sup>③</sup>があるが、これは学習の順序を示したもので、最初に音の相対的な高低を階段に分けて分析することを示している。

それ迄の日本の音楽、琴にしる、長唄、義太夫、謡曲の音階の表示は特殊なもので、芸の受け渡し、個人教授の形でなされたのに対し、一般性の強い音階表示であり、この点にまず特色がある。

次頁の表は、指導者と生徒の学習の方法を述べたもので、口授の方法については従前と異なることがない。

その次の表に見られるのは、五線と音符で、このような譜表を用いた表現法は、それまでの音の表示にはない、全く新しいものであった。

この音の表示が、西洋から移植されたものであることは言うまでもないことで、これによって、新しい曲の概念、感覚が生みだされることになる。

そして小学生に教えられたということは、やがて新しい洋式音楽が





新島襄は、西洋の芸術・技術はキリスト教を除いては考えられぬと主張し、日本にキリスト教の原理を植えつけるための大学として、同志社を創立した。その頃、政府はキリスト教の布教活動の禁令を解いた。

## 二、軍隊と洋楽

日本人の耳目に触れた最初の西洋音楽は、嘉永六年、日本を訪れた米国提督ペリーがその艦隊にのせてつれてきた軍楽隊であろう。最初に輸入した洋楽は、洋式軍隊訓練の一部として鼓笛楽―横笛・小太鼓・大太鼓から成る簡単な軍隊―である。維新の頃の大藩は、ほとんどみな鼓笛楽を訓練に用いた。

子 美 貝 深

吹奏楽と信号喇叭は、外国軍隊を手近な手本にして始め、明治二年には、英国の楽長フエントンに吹奏楽伝習を頼んだ。これが吹奏楽―ピッコロ・クラリネット・ホルネット・ホルン・トロンボーン・ユーフォニウム・バス・小太鼓・大太鼓の楽器―による最初の軍楽隊である。

明治五年、鉄道開通につき軍楽隊は楽を奏し、早くも儀礼用として活用された。

軍楽といっても鼓笛楽は、行進奏楽以外には役に立たないが、吹奏楽の軍隊は、儀礼用としても有用な点を早くも示した。この軍楽隊員は、音楽者から採られたのではない、音楽に親しんだ都会人から採られたものでもなく、主として武士の家に育った青少年から採られた。この人たちは江戸的な音曲も遊芸も知らない、幼時から幕末の風雲に揉まれ、軍事の一部門としてのみ軍楽を実践した人々である。

明治十年には、祭典の際に、「ポルカ」「クワトリュー」「童謡」等を

演奏した。

こういうふうには、明治初年の洋楽はまったく軍楽隊だけによって代表されていた。とにかく欧米諸国の富強におどろき、その進んだ文化に眩惑された人々が、欧米のものといえはひたすら畏敬した明治初年であるから、軍楽隊は西洋先進文化の具体的なものとして世間に好奇の目を向けられ、西洋人の好む音楽というものを演奏する軍楽隊を尊んだ。

明治十二年には、ドイツの楽長エッケルトを軍楽隊雇教師とし、猛烈な訓練をやり急速に技術を向上させるとともに音楽理論も教えて作曲の根底を作った。明治十三年には、ドイツ婦人アンナ・レーヤを海軍楽隊ピアノ教師として、ピアノの稽古をさせる等、軍楽隊は洋楽の普及に大きな力があり芸術的な方面に乗り出すような体制に進んだ。

## 三、教育制度と教科

明治初期に西洋が移植された事の具体的なあらわれとして、政府は明治五年八月「学制」を頒布し学問を奨励し、「自らの身をたて身代を治め渡世を榮あるものにするのは学問の他にはない。今までの難しい理論を学ぶのではなく、日常必要な読み書きソロバンを学ぶ。それは人の為であり国の為である。又、武士階級以上の人だけのものではなく、一般の人民（華士族卒農工商及婦女子）はすべて学校に就学すること」（要約）と学制制定の精神および政府の教育の基本理念をはじめて明らかにしている。

明治四年に政府は、小学校・洋学校を、明治五年には女学校を設立した。学制制定の際、文部省は学制施行に関する当面の計画の第一と

## 明治教育制度の中の唱歌

—— 洋楽的性格と歌詞の倫理 ——

深 貝 美 子

Songs in the Meiji Educational System.  
: The Occidental Characteristics of  
Music and the Ethics of the Words  
of the Songs :

Yoshiko Fukagai

はつめい

明治維新は、それまでの政治機構の根本的な変革であり、また、西  
欧の文化文明を摂取しながら、新しい文化を創り出してゆこうとする  
動きの中で、音楽教育はどのように進められていたのか。

明治政府は、新しく教育制度を定め、一般の子弟の教育を盛んに  
することで、西欧諸国の文明に追いつこうとするのであるが、その中  
での音楽教育は、教育内容を米国を範とするために、いろいろ想像も  
つかない困難があったと思われるのであり、また、それを学ぶ児童た  
ちにも戸惑いがあったことは容易に想像出来ることである。

この稿では、最初の教育制度の中の音楽の扱いと唱歌集の内容がど  
のようなものであったかをながめると同時に、そこにつけられた歌詞  
がどのような性格をもつものであったかをながめてみようと思う。

### 一、明治政府の欧化政策

新しい明治政府は、社会制度や経済制度の変革を認め、西洋の影響  
の下に積極的な近代化政策を打ち出した。しかし、日本の伝統と西洋  
の影響との相互関係は決して全く一方に偏るものではなかった。

西洋化の過程は、早くから始まり、維新前にも「幕府」と「藩」と  
が行った。幕府は、最初約八〇人の「武士」の役人から成る使節団を  
「通商条約批准のため米国に派遣した。その中に、後に維新直後の近代  
化の提唱者の一人として有名になった福沢諭吉がいた。第二回の幕府  
の使節団は、イギリス、オランダ、フランスを回った。また長州藩は、  
五人の若い武士を秘かにイギリスに派遣し、その中には伊藤博文と井  
上馨がいた。薩摩藩は、寺島宗則と五代友厚を含む一九名を外国に行  
かせた。

維新頃、政府は必要な改革を見越して、外国人顧問を組織的に雇用  
し始めた。新しい大学や医学校設立のためにドイツ人専門家が用いら  
れ、アメリカ人顧問は農業試験場や全国的な郵便制度の設置の援助を  
した。その他、新しい小学校制度を設ける助け、外交技術の指導等、  
外国人専門家が活躍した。海軍はイギリス式制度に基づき、陸軍はフ  
ランス軍事教官に頼った。

明治初期に唱えられた「文明開花」は、日本が未開の状態から抜け  
出しつつあると考えた人々の主題となった。「文明開花」提唱者として  
きわめてめだつた福沢諭吉は、「西洋事情」を出版し、外国における議  
会・鉄道・大学等を記述した。彼は、西洋思想を日本に適するよう解  
釈し、改革の必要を国に説く知的指導者として現われた。彼は「学問  
のすゝめ」「文明論之概略」を出版した。封建的な社会価値とそれを支  
える旧来の教養を嫌い、日本人のために近代文明の意味を解き明そう  
とした。